

テレビ 池上綾乃

「テレビ」は黎明期のテレビ番組を観て始まった研究室。番組の背景、つくる人々に興味をわく。次第に「集団」について考えるように。研究員の池上とササキで活動。「集団のメモ」の映像とテキストの展示を行う。

気になっていたこと

日本では一九五三年に始まったテレビジョン放送。黎明期のテレビ番組には、制作者自身がテレビというメディアの特性を自覚的に捉え、ユニークな方法論のもとで制作されたものが多々あります。しかしそれらのテレビ番組の多くは、テレビのもつ一過性や権利上の問題などから、現在では見る機会すら限定された状況にあります。私は幸運なことに、あるシンポジウムの上映会で黎明期のテレビ番組に出会い、その斬新さと面白さに驚愕しました。なかでも夢中になったのが、一九七〇年代に放送された今野勉演出の旅番組シリーズ『遠くへ行きたい』です。番組構成が毎回違い、それぞれがまるで実験映画のような自由さで、とてもテレビ放送されていたとは思えないものでした。「どうしてこんな番組が生まれたのだろうか?」「どうやってつくったのだろうか?」と考えるも、まったく見当がつかない奇抜な番組で、演劇のプロジェクト(「アトレウス家」)を想起させるような質

感ずられました。昔のテレビ番組が現代の演劇を想起させる、私にとってそれはまったく予期せぬ事態で、黎明期のテレビ番組は決して過去を生きるものではなく、「いま」なにかをつくること／考えることに生かせるのではないかと思うようになったのです。

「研究室」という旗を上げる

私は黎明期のテレビ番組への熱い思いを長らくひとりで抱えていましたが、つくりかた研究所が研究室体制をとったとき、初めてその思いを自分以外の人に知らせることができました。黎明期のテレビ番組からなにが考えられるのか、なにかをつくること／考えることに生かせるのではないかという漠然とした関心と直感しかありませんでしたが、「こんなことが気になっている人もいます」と知らせる旗を上げるような気持ちで「研究室」を立ち上げようと思いました。ミーティングをするためのミーティングをする、*「逆進」*の習性をもったつくりかた研究所の「研究室」だからこそ、具体的な目的や方向性が定まっていなくても、番組のなかに焦点を当て、どんな活動をするのか、そこから考えられると思ったのです。

テレビ研究室(テレ研) 立ち上げ時

私は研究素材である今野勉の『遠くへ行きたい』を観て、つくり手たちがテレビをつくることで、土地を記録・記憶しているような番組の質感、創作方法、どういう集団によってつくられていたのかが気になっていました。そのため、立ち上げ時に気になる項目として挙げていたのは、「記録性」と「テレビをつくる集団」です。一方で、テレ研研究員のササキは、テレビというメディア、放送、一九五〇～六〇年代という時代、記録など、かなり広い関心をもっていました。それは私にとっては新しい視点で、なにかについてひとりで抱えるのではなく、複数人に開いて考えることの面白さを改めて感じました。また、ササキは黎明期のテレビ番組を鑑賞できる機会が限定されていることにも問題意識をもっていました。加えて、ほかの研究員に『遠くへ行きたい』の斬新さ・面白さを説明しようにも言葉ではまったく伝わらない歯痒さから、私たちは研究所内部で番組を見る場、「テレビを観てみる会」を設けました。観る人によって気になる部分や感想は違うので、番組からなにが考えられるのかをリサーチする機会にもなると思ったのです。

リサーチそのものを本質として取り組む／線を引き

立ち上げからしばらく経ったころ、私は自分が気になっていることに対してどんな研究

活動が適しているのか考えあぐね、具体的な企画案に結びつかず困っていました。そんなとき、ササキから柔らかな提案がありました。それは、最終的な形態を先んじて画定することで取りこぼしてしまうものがあるとしたら、リサーチそのものを本質として取り組んで、気になっていることに対して適切なあたりのつくりかたを編み出すことにもっと時間をかけてもいいのでは、というもの。しかし一方で、プロジェクトイブ（投企的）に動くために線を引きこともまた必要だろう、とも言われました。前者は、つくることを主眼としない、つくりかたの研究所だからこそ大切にできる考え方だと思います。正直、いまの私であればその道を選んだかもしれません。このとき「つくりかたから考える」がどういうことなのかしっくりきていなかった私は、ササキが残した後者の言葉に反応しました。なにかやってみる、やりながら考えられることがあると思っただけです。ちょうど『だれかのみたゆめ 展示と実演』への参加不参加も決める時期で、この中間報告の場でなにかしから発表すると設定して取り組んだほうがモチベーションも維持しやすいと思っただけ（しかし、自分たちでモチベーションを維持する環境をつくること、これはつくりかたの研究所で活動する上で非常にむずかしく、大きな課題でもありました）。

「記録」に焦点を当てる

線を引きくことを選択したテレ研はいくつか企画を考えましたが、時間・エネルギー配分、ゼロからなにかをつくることに対する私の尻込みなど諸々の条件から、「記録」に焦点を当てようと思いました。たとえば、エスノドラマ研究室のワークショップ。その時間、そこで起こっていること、そこでの参加者の反応こそが面白いと感じていたため、彼らが『展示と実演』に向けて動き始めたときにこぼれ落ちてしまうものを「記録」して、第三者にもそれを伝えられないだろうかと思っただけです。しかし所長から、研究室単体ではなく研究所全体のことに目を向けてもいいのではと提案をもらい、研究所そのものへと関心が広がりました。

ひとりではつくれな

このころ、何度か企画書を書き直し、混乱し始めていました。ひとりではつくれな、無理だと思いい、テレ研の研員ではないけれど一緒に『遠くへ行きたい』を観たり話をしていた研究員の堀切に、『展示と実演』の企画のみでいいから、テレ研の相談に乗ってほしいと特別協力を頼みました。ひとりでは考えるのではなく、逐一相談できる人、話を聞いて整理してくれる人が必要で、その点で信頼できるのは、堀切をおいてほかにいないと

思ったのです。

『思想とソープ・オペラ』に打ち戻る

『展示と実演』一か月前の報告会で、研究員の佐藤（成）からの「テレ研は、テレビのなにを研究しているの？」という素朴な問いにはっとしました。テレビと企画とのつながりを自分でもうまく説明できなくなっていたことに気づき、テレ研でそれまでにふれていた資料を読み返して「思想としてのテレビ」に立ち戻りました。テレビ制作者今野勉の研究者である松井茂は、放送としてのテレビが無くなっても、今野勉の生き方、テレビに向き合う態度である「思想としてのテレビ」は残るだろうと言っています。『展示と実演』では、その組織論の部分に注目することにしました。今野は、テレビマンユニオンという日本で初めてテレビ局から独立した制作者集団、番組制作会社を設立した人でもあります。テレビにおける集団について、少し長いですが以下に引用します。

《横一線で走る組織》

今野…日本の映画界、演劇界では、徒弟制度が当たり前のようでありました。「……」つまり映画や演劇を作る集団とか組織は、表面的には非常に新しい革新的なことを扱って、時には革命だとか人間の平等をテーマにしていますよね。しかし内部に行くと、女性蔑視だったり、すごい権威主義だったりすることがある。トップが天皇で、下の方は奴隷みたいな組織になっているとか、義理人情だったりする。「……」いまはどこでも大分改善されてきたと思うんですけど、そういうことが日本では当たり前だったわけですよ。

今野…テレビマンユニオンの組織の原理は、「合議」「対等」「役割分担」なんです。それは制作現場にそのまま現れるわけですね。カメラマンであること、オーディオマンであること、ADであること、ディレクターであることは、「役割分担」であって、人間の上下じゃない。「対等」なんです。作品に対して、役割は違うけれど、責任とか使命は同じ。

《民主主義から作品は生まれない?》

今野…テレビマンユニオンが始まった頃にこういう議論がありました。「民主主義から作品なんて生まれない。独裁だろうがなんだろうが、結果としての作品がよければいい。途中の過程は関係ない」という議論です。

つまり民主的に作品を作ったって、そんなものは何を保証するわけでもなく、自己満足だけだという議論です。だから、組織の原理がスタッフの人間関係を作り、その人間関係が良い番組を作る。そういう相関関係を実証しなきゃいけない。テレビマンユニオンがそれを実証できたのかはわかりませんが、どこもやってこなかったし、誰もやってなかったことを始めたことだけは確かなんです。

《今野勉は指示しない》

今野・自分だけの世界をつくるんじゃないやなくて、いろいろな人がそれぞれに参加する形をつくりたい。そうするとディレクター不在になるという話になる。ところが本当に不在では番組は作れない。なぜならば、そういう方法を作り出すことがまさしくディレクターだから。ディレクターが存在しないように作るという作り方をディレクターが編み出さないとそういう番組はできないんです。

(対談『思想としてのテレビ』今野勉×松井茂「より抜粋」)

つくりながら考える、その権利

一月末、『展示と実演』の監修中野からツッコミを受けました。『遠くへ行きたい』をつくる集団への関心から、つくりかた研究所という集団へ、「巧妙にすり替わってない？」と。研究員へのインタビューも開始し、それ自体意義があると感じながら進めていただけに、「テレ研としてそれやる意味があるの？」と問われたときには消沈し、その問いに対して言葉を返せないことにも消沈しました。魔のミーティングだったと落ち込みながらの帰り道、私は堀切と話しながら徐々に開き直りました。変な話、私はつくるプロじゃない、つくりかた研究所の研究員だということを出したのです。私は日頃から、誰でもなにかをつくれるわけではないと思っています。でも、誰でもつくっていいとも思っています。つくりきるまでいかなくとも、つくりながら考える、その権利はあると思っています。そういう意味では、誰でもつくれる場があってもいいのではと。私は、つくりかた研究所をそのひとつのかたちと捉えて参加していました。プロじゃないので、うまくつけれないのは当然のこと。でも、だからといって「つくりかた」ではなく、たとえつくりきるまでいかなくとも、つくる大変さ+（プラス）なにかを得てもいいと思うのです。秋葉原駅で堀切とふたり、どう整理しても「巧妙にすり替えられている」ことは否定できず、認めざるをえませんでした。でも、飛躍はしたものの『遠くへ行きたい』を出発点とした私の興味関心からは外れてないという感覚があったので、それを頼りに、飛躍を自覚した上でインタビューを続行しました。

あらためて「集団」をキーワードに掲げる

最終的にテレ研は「集団」というキーワードの調査過程を報告しました。つくりかた研究所にはどんな人たちがいて、彼らはどんなことを考えているのか、研究所のメンバー二四名にインタビューを行い、「集団のメモ」をとったのです。当初は、集団を構成する個人にフォーカスを当てるためにインタビュー映像の展示のみを計画していましたが、製作途中、映像編集の参考とするため各々の回答をテキストに起こしていたところ、質問項目ごとに並べた表がササキと堀切の目に入り、ふたりはその表に強い関心を示しました。この表の形式が回答の多様さや傾向、すなわち集団の性質と呼ぶうるものを把握させることを発見したのです。予期せぬ嬉しい発見でした。そんな経緯で、それぞれの発言のディテールや人となりを伝えるものとしての映像と、映像によるリニアな語り方とは違って「集団」の面的な把握を可能にする一覧表形式をもつ印刷物を、一対の展示とすにりました。

テレ研から、つくりかた研究所のこと

テレ研は「集団のメモ」を展示しましたが、なにかをつくったような気はしませんでした。つくったというより、黎明期のテレビ番組という出発点から「集団」を考えている時間、渦中だったのだと思います。その後、テレ研としての活動は休止しましたが、なにか止まっ

たり、終わったりという感じはせず、テレ研という旗から少し離れた、移動したという気持ちです。

話は飛んで、つくりかた研究所全体のこと。「つくりかたから考える」、創設者が繰り返し口にしてきたこの言葉、三年目にしてようやく身体に染みてきました。私はとくに、人の集まりのつくりかたを考えてきたように思います。研究所内部の報告会、テレビを観てみる会、テレ研インタビュー、研究室のミーティング……どれも人の集まりが関係していました。とりわけ報告会からの発見は多かったです。当日進行を積極的に引き受けていた研究員の塩田と報告会係の私が欠席し、代わりに研究員の大川原が進行したときのこと。いつもなら終了後にゆるゆるとおしゃべりが続き自然と交流の場が生まれていたのが、やけにさっぱり解散したそうです。そのあと大川原から、「だれが司会進行をするかで報告会の空気・性格も変わる。報告会は研究所にとって唯一定期的に開催する大切な集まりなので、塩田を正式に報告会の進行役にして、毎回の質・空気を安定させよう」と提案をもらい、即採用しました。初年度使用していた秋葉原のA331の部屋から北池袋の拠点に移った際には、空間が狭くなり緊張感が増しました。どうしたらそれぞれの状態をキープした居心地の良い集まりにできるか、話し手な人が話しやすくなる環境をいかにつくるか、集中しすぎない、良い意味で意識が分散される環境づくりなど、報告会

前にはよく塩田と電話で相談して、毎回、報告会のつくりかたから考えていました。

つくりかた研究所という集団を考える上で気になるのは、強制力と指示のなさです。これは良くもあり、ときに乱暴でもあると大川原は言っていました。私もそう思います。強制力がないと、こぼれ落ちてしまうものもあります。自発的に残そうとしなければ、研究所の活動を通して思っていたこと、考えたことも消えてしまうのだなと思ったりします。つくりかた研究所は不思議な集まりです。全員がメインの活動を研究所の外にもついで、研究所の活動をしない時期もあるけれど、それぞれの場所で研究員としていられる。考えていることや活動にかなりばらつきがあっても、つくりかた研究所の研究員という状態はキープされています。この状態は身体に染みていて、消えなさそうな気がしています。